法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

「Y日記」から見たサンパウロ州の日系農業小生産者の生産と生活(5)プルデンテ市近傍の日系農業小生産者の二次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格

西川，大二郎

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要．社会科学編 / 法政大学教養部紀要．社会科学編
(巻 / Volume)
98
(開始ページ / Start Page)
89
(終了ページ / End Page)
103
(発行年 / Year)
1996-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004607

Hosei University Repository

「Y 日記」から見たサンパウロ州の日系農業小生産者の生産と生活(5)

——プルデンテ市近傍の日系農業小生産者の二次的集団地「ミネのムラ」の社会経済的性格——

西　川　大二郎

目　次

Ⅰ．まえがき—問題の所在—
Ⅱ．「ミネのムラ」の経済的性格の概略
(1) 日系農業小生産者集団地の形成
(2) 「ムラ」の人口構成
(3) 「ムラ」の構成員の土地所有規模と農業経営類型
Ⅲ．「Y 日記」から見た日系農業小生産者の生産と生活の様態
(1) Y 氏の生活史
(2) 「Y 日記」の小さな解説
(3) 「Y 日記」記入費目の吟味
(4) 「Y 日記」の分析のための費目の分類
(5) 全費目についての分類，整理の結果
(6) 農業生産について
(7) 家計支出について
Ⅳ．「ミネのムラ」の生活様式と社会経済的特性
(1) 構成員の出身地
(2) 婚姻関係
(3) 雇用関係に見られる「外人」観—人種，民族問題—
(4) 「日本語」学校教育
(5) 宗教生活　(以上前号)
承前
④ ブラジルと日本の「墓参り」の意味づけ—追補　(本　号)
⑤ 本願寺の進出とプルデンテ地域の日系社会—追補
(6) 文化生活
(7) 生活圏　(以下次号)
(8) 社会集団の特性
Ⅴ．結　び

Hosei University Repository

承　前

(5)　宗教生活

④　ブラジルと日本の「墓参り」の意味づけ―追補

［注］

片や墓地の前で魂の供養をする。片や墓地の前で故人を偲んで語り合う。内容は異なるが，景色は同じで異和感がない。そして同じ場において，次第に内容が底流において故人を偲ぶことで通ずるものとなる。

⑤　本願寺の進出とプルデンテ地域の日系人社会―追補

［注］

プレジデンテ・プルデンテ市の本願寺の由来については，ブラジル仏教徒協議会編『伯国仏教篤信功労者名鑑』の中に次のような記録がある。ただし，この本の発行年は記載されていない。またページがふられていない。しかし，この本は日本移民五十周年記念と銘打たれ，一年遅れて発行というから，1959年刊と推察される。

そのプレジデンテ・プルデンテ本願寺の項には次のような記載がある。

「プレジデンテ・プルデンテ駅の開かれたのは1920年という。」そして「（プレジデンテ・プルデンテ駅北方に接する―引用者付記）ボアヴィスタ Boa Vista，サンキョー三共 Sankyo が邦人集団地として最も古く，1930年頃」，さらに「1930年8耕地に日本移民228戸」とある。

「日本人の発展は，宗教的には，カトリックと仏教に導かれた。」という。

「プレジデンテ・プルデンテ本願寺の創立：昭和24（1949）年5月5日，安芸門徒の流れをくむ片岡音吉，大石庫太，島田正三の発起で，八十山風水師を招じて法悦会を開く。昭和26（1951）年に同市に説教所を創る。」「委員長：高田市次郎，委員：相原安太郎，大石庫太，斉藤寅寿，片岡音吉，島田正三，田口清九郎，市来清八，畑中善輔，園木門四郎，原田茂七郎，坂口文治郎，弓削重郎，小畑源四郎，高木菊太郎，宮崎キト，高岡スエ以上十七名。」

昭和27（1952）年2月3日，吉辰を卜して地鎮祭を執行。

昭和27（1952）年10月15日「東本願寺法主大谷光暢台下並びに智子裏方の御巡錫の際に立ち寄られ，記念樹の御手植えあり，」

Hosei University Repository

昭和29（1954）年6月18日，46年前の日本移民サントス着と同月同日。

同年7月15日「西本願寺門主大谷光照猊下並びに嬉子裏方をお迎えして落成，慶讃，法要並びに入佛式が嚴修せられ，……」

事業としては「出張法話，婦人会，男女青年会，日曜学校，日本語学校」とある。

このことから，Y氏は本願寺の中でももっぱら東本願寺に関わっていることがわかる。またこれらの本願寺派の仏教教団は，出張法話のほかは，婦人会，男女青年会，日曜学校，日本語学校といった邦人移住地単位の村落的基盤の上に活動を進め，また，日本的村落の再生を強化しようと図っていることがわかる。

(6) 文化生活―特に外部とのコミュニケーションを中心に
（ラジオ・新聞・雑誌・日本政府機関との関係）

① 「Y日記」に現れた外部コミュニケーションに関わる文化生活の記録

まず，Y氏の文化生活を，特にラジオ・新聞・雑誌・日本政府機関との関係を通じた外部とのコミュニケーションを中心に検証してみよう。

「Y日記」は基本的に出入帳簿であるため，主観的記録はほとんどない。にもかかわらず，「ムラ」の外の世界との関係で，断片的ではあるが，日本人移住者であるY氏のアイデンティティの結晶化を示す記録が示されていることを見てとることができる。

まず，この「Y日記」が本格的に記録され出したのは，昭和20（1945）年1月から開始された第2冊目からであり，その冒頭に，「千里乃道も一歩よ里進む」と墨書されていたことは，既に述べた。そこで，私は，Y氏がこの記録を実行することになみなみならぬ気構えを持ったことを感じたと記した。

まず，その年の初めに「昭和20年1月23日　天皇陛下御真影（20クルゼイロ）」と，「御真影」の購入の記録がなされている。しかし，昭和20（1945）年8月15日の日本のポツダム宣言受諾前後は，淡々と生計の支出が記載されているだけである。

ただし，昭和20年の雑記の部分に次のような記載がなされていた。

（北米デマ全部）

昭和弐拾年八月十五日后前(ママ)七時

Hosei University Repository

天皇陛下申下賜シ　日本ヨリ（ラジヲ(ママ)通信）
「暴撃(ママ)原子為　四ケ国ニ對スル共同件宣傳(ママ)ヲ委託スル」
［註としての解釈：「爆撃原子ノ為メ　四ケ国ニ対シテ共同宣言ヲ受諾スル」］
同十六日午前七時ラジヲ発送
内閣総自職(ママ)並ビニ人民報道日本一億万人民涙ダヲ流シテ感激ス件

その上，この記載は，後のことであろう，大きく×印（バツ印）によって，消されている。この×印が，何時書かれたかは定かではない。

以来昭和 23 年まで，生産と日常物質生活に関わる記録に終始するようになった。昭和 23 年以後になると，少しずつ文化に関わる支出が現れる。以下，記録からその部分を取り出して示す。

昭和23年 4 月13日	『光輝』本一冊払い	40 クルゼイロ
5 月23日	蓄音機修理代	25 クルゼイロ
昭和24年 3 月19日	新聞払込み矢野商店渡し	110 クルゼイロ
9 月 1 日	新聞代 6 ケ月分支払い	120 クルゼイロ
昭和25年 4 月11日	日本より水泳選手歓迎出費	300 クルゼイロ
6 月20日	福岡県人年鑑料半金井上払	200 クルゼイロ
8 月16日	雑誌『輝光』(ママ)一冊	25 クルゼイロ
8 月19日	蓄音機針 1 個	15 クルゼイロ
昭和26年 2 月10日	プルデンテ市日本より勝太郎 並びに東海林太郎入場券 5 人分	400 クルゼイロ
2 月11日	勝太郎芸見相渡し	100 クルゼイロ
2 月17日	勝太郎入場券	80 クルゼイロ
4 月23日	新聞料半年払い	120 クルゼイロ
4 月29日	天長節寄付金当区日本人会運動会	500 クルゼイロ
9 月14日	『輝』(ママ)雑誌 1 冊	25 クルゼイロ
10月26日	『光』号(ママ) 9 月分	25 クルゼイロ
昭和27年 3 月19日	天長節　新聞広告料	60 クルゼイロ
4 月29日	天長節運動会日本人会寄付金	300 クルゼイロ
昭和28年 9 月 7 日	サンパウロ四百年祭寄附金出	100 クルゼイロ

Hosei University Repository

9月9日	『中外新聞』料6ケ月分	150クルゼイロ
昭和29年4月25日	天長節運動会村内寄付金出	200クルゼイロ
7月6日	『サンパウロ新聞』代払い	300クルゼイロ
7月7日	ラジオ購入代払い	4,000クルゼイロ
9月20日	『南米時報』新聞代	300クルゼイロ
11月13日	ラジオ電気料	500クルゼイロ
12月31日	新聞料払い	500クルゼイロ
昭和30年4月28日	『中外新聞』代払い	390クルゼイロ
6月9日	『中外新聞』昭和29年3月～30年6月	300クルゼイロ
12月3日	靖国神社出	50クルゼイロ
12月30日	雑誌	30クルゼイロ

この「Y日記」の記録解読のための幾分の解説が必要であろう。そこで，上記の記録解読のために必要と思われる事がらについて，幾分の解説をする。

② 第二次世界大戦前のブラジルにおける日本移民の一般的状況

まず，第二次世界大戦前のブラジルにおける日本移民社会の一般的状況について述べておこう。

この点についてはさまざまな資料があるが，ここでは，もっぱら，香山六郎編著（1949）『移民四十年史』，移民七〇年史編さん委員会編（1980）『ブラジル日本移民七〇年史』ブラジル日本文化協会，移民八十年史編纂委員会編（1991）『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会を参考にした。

第二次世界大戦前のブラジルへの日本移民は，昭和16（1941）年8月13日，サントスに入港した移民船ブエノスアイレス丸から上陸した417名をもって終わりを告げた。それまでのブラジルへの日本移民総数は約19万人であった。

ブラジルへの日本移民は，結果として永住したものが大勢を占めたが，戦前においては決して永住型の移民ではなかった。昭和14（1939）年に刊行されたサンパウロ州中西部のバウルー在日本領事館管轄の移住者実態調査報告書「バウルー管内の邦人」によれば，調査全数1万2千人のうち，85%が帰国，10%が永住，残りの5%が不明という回答を寄せている。また「昭和14（1939）年のブラジルからの帰国者数は2011人であり，同年のブラジルへの入国者1546人よりも多かった」という山田宙子（「昭和前期ブラジル移民の諸問題」立教大学ラテンアメリカ研究所報，1984年）の報告もある。ブラジルに

Hosei University Repository

おける日本移民社会は日本の延長であり，その限りで，ブラジル社会に対しては「閉ざされた」ものであっても，日本に対しては「開けた」社会を作っていた。それが，一転して永住型に変わったのは，日本が連合軍に対して宣戦を布告してからのことである。

日本の第二次世界大戦への参加によって，昭和17（1942）年1月29日，ブラジルは日本を始めとする枢軸諸国との間の国交断絶状態にはいった（ブラジルが日本に宣戦を布告したのは，ずっと後の昭和20（1945）年のことである）。その年の7月，在ブラジル日本大使以下公館員が日本に引き揚げた。日本人権益部がサンパウロのスペイン総領事館内に設置され，その後スペインが枢軸側に加担してからは，中立国のスエーデン公使館でその業務が続けられたとはいえ，日本移民は，実質的には母国日本との関係を断たれたといってよい。特にブラジルを日本の延長の出稼ぎ先と考え，いずれは錦を着て故郷に帰るつもりで，そのように行動していたものにとっては，日本政府によって「取り残された」，場合によっては「棄てられた」と感じた。ブラジルの日本移民は，交戦相手国の国民として，部分的には，特に海岸地域居住者は強制収容・転住を強いられた者もあった。一般的に言えばアメリカ合衆国で受けた程の過酷さはなかったとはいえ，日本の資産は凍結され，日本語新聞の発行は停止され，短波ラジオの受信は禁止され，旅行など移動の禁止，集会の禁止，日本語学校の閉鎖等が命ぜられた。

一般的に出稼ぎ的性格を強く持っていた第二次世界大戦前の日本移民にとっては，いずれ日本に帰国することを前提とすれば，ブラジルの言語・文化や社会に馴染む必要はなかった。そして，日本に帰国するものにとっては，日本語教育は，特に子弟の日本語教育は，条件によって実現可能か否かは別として，大部分の移住者にとっては大きな希望であり，欠かせないものであった。その中でも，大正13（1924）年から昭和恐慌にいたる，つまり満州事変直前の昭和4（1929）年頃にかけて現れた日本の「国策移民」は，特に日本の諸機関との関係が強く，日本移民は集団地を形成するようになった。それは時によっては植民事業の方途として日本の「むら」の分村計画の色彩をもって進められた。そのため，日本移民は日本移民だけで集団化し，その結果，自作農化したものが増えたとはいえ，ブラジルの社会に背を向けていたことにおいては変わりなかった。戦時下のブラジル政府による日本移民に対する前記のような行動の制限は，ブラジルの言語生活，広くは世界の情報に背を向けていた日系人社

Hosei University Repository

会を，世界の情報からますます隔絶させ，結果として閉塞状況に置くことになった。

戦時下の閉塞状況は，日本移民を自作農化への道を選択させた。しかし，それはブラジルへ永住する道を示すのではなく，日本の勝利を信じて，戦後においての錦衣帰郷を実現するための方策であった。つまり，土地を手に入れることは，一獲千金の商品生産を実現する手段であった。ところで，日本の開戦後まもなく，突然ハッカと繭の国際価格の高騰が起こり，ハッカ栽培と養蚕に従事する日本人移住者は経済的に潤うことになった。既述（「生産と生活(1)」pp.9−10）のように，Y 氏も戦時中の昭和 17（1942）年にハッカ採培に走っている。しかし日本移民社会の内部では，それらの生産は連合国に戦略物資を供給する利敵行為だという指弾がなされるようになった（「成立過程」pp.69−70）。

心情的に日本国にアイデンティティを求める一方で，ハッカ栽培と養蚕に走り経済利益を追求する移住者の心は，まさに矛盾した心情そのものであった。個人の矛盾した心情は社会に反映され，日本人移住者社会の中に，心情派と経済合理派とが胚胎されてきた。日本移民社会が閉塞状況に追い込まれた戦争の末期に，「赤誠団」を初めとするいくつかの心情派勢力が結集し，昭和 20（1945）年 5 月に「臣道聯盟」が発足している。

日本の敗戦を契機にして，敗戦を信じない，いわゆる「勝ち組」（「心情派」，「信念派」ともいわれる）と，日本の敗戦を事実として認めた「負け組」（「認識派」ともいわれる）の両派が，戦後，昭和 21（1946）年 3 月の「勝ち組」による溝部幾太暗殺というテロ事件以来，血を血で洗う抗争を続け，襲撃・傷害・暗殺等 109 件の末，昭和 22（1947）年 1 月のテロ事件を最後としてやっと終焉することになった。ここでは，この，いわゆる「勝ち組・負け組」事件を追うことはしない。この事実をいち早く報じたのは高木俊朗（1970）『狂信』朝日新聞社であるが，長い年月の後，冷静にその客観的資料を提示した詳細は，特に前出の移民八十年史編纂委員会編（1991）『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会，特に「第 4 章　移民空白時代と同胞社会の混乱，140−229 ページ」及びポルトガル語版 “Uma Epopéia Moderna, 80 Anos da Imigração Japonesa no Brasil” 1992. pp.247−380，に記述されているので，それに譲ることにする。

ここで試みたいことは，この事件に積極的に参加することはなかったが，当

Hosei University Repository

時の状況の中にあったＹ氏という一般の日本移民の心情と行動を，「日記」の中から少しでも読み取ることである。

前述の日記の冒頭の「千里乃道も一歩よ里進む」と墨書されていたのは，日本がポツダム宣言を受諾する前のことであり，昭和 20（1945）年 1 月 23 日に天皇陛下の「御真影」が 20 クルゼイロ（当時のパン 1 個は 1 クルゼイロ，タバコ 1 カートンが 20 クルゼイロであった）で購入されている当時のことであった。それはまた，「臣道聯盟」の結成前夜のことであったこと，そして「臣道聯盟」結成後はプレジデンテ・プルデンテは，ソロカバナ地方の運動の拠点となったところであることは記憶しておいてよいことであろう。

この閉塞状況下における緊迫感が帰国の不可能なことを予感させ，定住を覚悟させた。これが日記の冒頭の覚悟表明の言葉になったのであろう。

③　雑誌『光輝』購入について

情報の源泉として，雑誌と新聞とラジオは重要である。したがって，それらのメディアの性格把握は，移民の行動様式の性格把握のために必要なこととなる。

「Ｙ日記」には，昭和 23（1948）年 4 月 13 日に雑誌『光輝』，昭和 25（1950）年 8 月 16 日に，雑誌『輝光』[ママ]一冊購入の記録がある。また昭和 26（1951）年 9 月 14 日に雑誌『輝』[ママ]，10 月 26 日にはＹ商店からの『光』号[ママ] 9 月分に対する支払いの記録がある。また，昭和 24（1949）年以降，新聞の購読が行われている。

これらの雑誌・新聞は，すべて日本語で現地で発行されていたものである。ところが，この当時，日系社会で発行されていた日本語の雑誌には，『旭新報』，『光輝（ヒカリ）』1947−，『輝号（カガヤキゴウ）』1949・3−1953，『臣道』，『青年』1953・5−，『旭号』1954−1956 といったものがあった。これらは，いわゆる「勝ち組」系の雑誌といわれているものである。

名前が似ていて紛らわしいうえに，記録が正確でないので，はっきりと照合できないが，Ｙ氏の購読したものは『光輝』ないし『輝号』であろう。『光輝』は表紙の誌名を右からの横書きにしているので，読みようによっては『輝光』となる。

月刊雑誌『光輝（ヒカリ）』光輝社，サンパウロ市バロン・デ・ジャグアラ街 767 は，昭和 22（1947）年 12 月 1 日に創刊号が発行された。一部 30 クル

Hosei University Repository

ゼイロス，半年 165 クルゼイロス，一年 300 クルゼイロスである。その創刊号は 220 ページを超し，一部 30 クルゼイロであった。

一口に「勝ち組」の機関紙といわれるが，ここで雑誌の内容を幾分検証しておこう。

創刊号「祝發刊」として，まず

「輝　皇軍祝戰勝」

「我が國を　守る海軍　萬里の波涛　けやぶりて　七の海を　日の本の　青空高く輝けり　尊き海軍　軍艦旗　拝せよ軍旗　おごそかな　皇軍喇叭（ラッパ）　世界にひびき渡りけり　身をすてて　皇國の為め　まっしぐら　進む兵士の　聖戰喇叭　戰勝喇叭　尊き喇叭」といった広告の辞が掲載されている。

また，「光輝発刊の趣意」は次のように述べられている。

「重疊する怪雲悪霧を突いて，輝き出でんとする陣痛に陣痛を重ねた『光輝』が，愈々合法的な綜合月刊雑誌としての形態を整へ，本當の快雑誌として登場するに到りました事は，當『光輝』社として誠に快心事とする所であります。

今更事新しく雑誌たるものの使命が，奈邊に在りやに就きましては，牒牒駄筆に鞭打つの要は無いと信ずるものであります。

顧みまするなれば，無味乾燥なりし過去六年間の在伯同胞の生活，それは余りにも悲惨であり，無氣力であり，不統一であり，又一部邦人間には，自我自利に走り過ぎたかの感を深くせしむるものが在るのであります。その間在伯同胞は何をして來たか，果たして秩序のとれた，一つの日本人らしい思想的連鎖があったか，又凡ゆる意味に於いて同胞間の思想的動揺はなかったか。斯く想念し，斯く回想する時，遺憾乍ら，胸に一塊のメスを刺されたるの感を深くするものは，獨り吾々のみではないと思ふのであります。何故在伯同胞三十萬万が，何時までも，一つの理念の下に行動を共になし得なかったか，と言う詮索は別として，少なくとも日本人として恥かしからぬ覇氣と，大和民族らしい心の働きがあって欲しかったのであります。そうした意味に於て，祖國日本が立憲君主政体であるは論を俟たず，國家を構成し，國家を運行するものは，萬世一系の天皇統治下にある赤子，悠遠三千年の血を享けついだ日本人であるの精神の下に三十萬同胞が生きて欲しかったのであります。

斯うした點を追求し探究して行く時に，吾々は常に何か物足らぬ淋しさを感ずると同時に，吾々はもっともっと日本晴れのしたすがすがしい生活，常に胸

Hosei University Repository

襟を開いて語り得る愉快な生活の出來る社會を，建設して行き度いと言う念願に燃えていたのであります。此の思ひは獨り吾々のみではなかったと考へるものであります。三十萬同胞の等しく念じて止まなかった一つの理想ではなかったかと斷じて疑はないのであります。斯ふ言ふ様な思ひを持つ同志が相集り，迸り出づる赤い血潮のながれは之をせき止め得ず，遂に『光輝』の誕生となったのであります。

勿論本誌は誰の獨占のものでもなく，又誰の支配も受ける事なく，飽くまでも吾々は日本國體の尊厳を高調し，始終一貫して同胞思想の中堅たるべく權門に屈せず富貴にいんせず，常に獨立不キの權威を保ち，時代に阿附せず當ろにこびず，山中高士の風格を保持せんとするものであります。斯うした趣旨の許に誕生した『光輝』は皆様の雜誌として，又皆様の意志發表機關として，大いに指導鞭撻して頂くと同時に，常に壯快な雜誌として三十萬同胞の要望に應へて行き度いと念じてゐるものであります。」

また「巻頭言」には，「認識と言ふ言葉」と題して，次の一文が掲載されている。

「戰争の勝敗に眩惑されてゐる間は真の認識は生れない。

終戰後盛んに認識と言ふ言葉が使はれる様になった。さも新しい言葉の様に，そして一部の人が大勢の人に強ひるかの様に。

茲に言ふ認識なる言葉の意味は，ジュネーブの國際連盟脱退に際し，松岡洋右全權が，東洋に於ける日本の特殊的地位を知らしめんとして叩き付けた歴史ある一言ではある。欧米人に對する認識不足の一言である。少なくとも時局柄，吾々同胞に向って強ひる言葉ではない筈だ。

吾々が日本人本然の姿に立ち還へるならば，認識なる言葉もそう輕々しく口にすべきものではなく，寧ろその人達の，輝やく日本民族の優秀性と世界無比の國體と皇統連綿搖ぎなき皇室に對する認識の再認識を促し度い。悠久三千年の歴史ある大和民族の前途に黒星は無き筈，天下の皇道を行く事，ブラジル十月の春の櫻霞の中の朗らかさだ。進まんかな，祖國と歩調を一にして。

外つ國に移し植うとも櫻花
旭に匂ふ香をな忘れそ

胎盤を破って輝き出でんとする『光輝』の三十萬同胞に贈る言葉である。」

この雜誌はいわゆる「勝ち組」といわれるグループの雜誌といわれているも

Hosei University Repository

のである。そして，現在の状況から考えると，全く空疎で時代錯誤的な内容のものであるということは容易に知ることができる。

しかし第二次世界大戦に於ける日本の敗戦後の情報の不十分さと，敗戦という未経験の異常事態の中で，1946年3月から1947年1月までの間に起こった23件にも及ぶ暗殺事件，86件にも及ぶ襲撃傷害事件ブラジルに於ける日本人及び日系人社会の中で生じた混乱からの脱却を志向しようとしていることは読み取ることができよう。

この雑誌が「認識」という言葉にこだわるのは，当時の「負け組」は自らを「認識派」と称したからである。

「Y日記」に記載されているもう一つ雑誌は，昭和24（1949）年に創刊号を発行した『輝号（カガヤキゴウ）』（一部25クルゼイロス，半年130クルゼイロス，一年240クルゼイロス），輝社，サンパウロ市ビラ・マリアーナ，ピリツーバ発行である。

この『輝号』は，それ以前の昭和21（1946）年9月に，ガリ版で27ページの『輝号』（非売品）を出し，また昭和23（1948）年2月に，コンニャク版で38ページの同名の雑誌（やはり非売品）を出している。公刊された『輝号』は，1949年～1953年まで刊行された。

その「創刊の辞」には次のようなものである。（旧漢字・仮名遣いはママ）

「今次大戦は在伯日本人にとり峻厳な試練であった。凡ての日本人は教養や地位や名誉や財産等，一切の屬性とは關係なく一つの範疇を濾過されて，日本精神を有する者と失へる者とに區別された。日本人が日本人により，日本精神の有無を論議されると云ふことは，如何にも不健全な心理風景である。

日本精神とは何か，と問はれて躊躇なく應へ得る人は少ないであろう。それは必ずしも日本精神の缺如を意味するものではなく，明確に言葉で表現出来ないのであって，強ち非難の對象とはならない。精神は，命題として如何に理論づけられても一つの判断に過ぎなく，行爲として表現されるか或はその用意があって始めて価値が生ずるのである。

民族精神は知性による知識ではなく，民族が無意識の中に持っている本能的で而も宗教的な感情と意志である。即ち思惟により概念として理解しても，自己のものとして把握し難いものである。故に如何に高い教養と知識も，民族精神の深さを標示する状ママ件とはならない。日本精神が最も顯明に而も素朴に表現されたものは忠義である。凡ての日本的道徳は，根源に遡れば，忠義を素

Hosei University Repository

因としないものはなく，言葉を換へるなら忠義は抽象されたる純粋である。本誌は讀者諸氏と共に，本能的であり宗教的であるその純粋なるものに向って進むべく創刊されたのである。

人間は神でない以上，時には世の非難を受けることがあるに違ひない。しかし，我々が絶対に耐へ得ないのは，日本精神を失へる者と呼ばれることである。若しこの語が自己に當てられるやうなことがあったら，我々は死を擇ぶであろう。ところが同胞の中には，文字に表わすも畏れ多い，さるやんごとなき御方に對し，不敬極まる批判を加へ，國家を誹謗して何等苦痛を感じない者がゐる。人は假令如何に冷淡にされたにせよ，父母を，我が家を愛さない者はない。それは理由抜きにした本能である。國家に就ても同様であり，若しこれを愛さない者があったら既に彼は日本人ではないのである。況んや我々が受けてゐる國家の恩は實に絶大である。その恩に對して誹謗の言を以ってするは反逆であり，その無節操は食を供されゝば，誰にでも従ふ家なき犬にも比すべく，日本ばかりでなく，伯國にとっても亦不要なる人間と云ふべきである。

廣野に迷ふ羊の群は，歸路に導かれるためには鞭を受けるであらう。人も亦母國民に歸らんと欲するなら，心を鞭うたれなければならぬ。」

また「社告」は，次のように述べられている。

「抑々，吾々同志は，今日まで種々の難に逢ひ，禍をしのんで常に獨自的に其立場をまもり，一貫した信念と日本人として享けて来た精神（オシエ）に基き，又それを保って參りました。然し其間何々團体，會との関係は勿論なく，殊に亦同胞諸賢の意思を尊長ママしつとめて慎重嚴正を旨として意を俱にして来ました。今後と雖も，変らざる大信念と意気を以て所信を祖國に求め，公平な道を辿り，本業に邁進せんとするものであります。

就而，発刊に先立ち，異々意外の問合せに接し，多少の誤解の廉あるは本社の遺憾とする處であります。殊に雑誌『輝号』又社名『輝社』なるを以て雑誌『光輝』と混同された模様もあり，又其間やゝもすると流言蜚語が流説してゐるやも圖り難く，本社としても讀者諸賢に對し不快と複雑感を抱かしめるを意とせず，何等光輝との関係は勿論，他の何者の由来も絶對に無い事を，茲に，嚴として輝社の設立存在を明らかにして，讀者諸賢の誤解なき様敢へて聲明致す處であります。」

国家へのアイデンティティを絶対のものとし，日本精神の表現を忠義とする論理では，明らかに理性的思考の停止を指示している。

Hosei University Repository

また「社告」として，『光輝』との関係を否定する文章を載せているが，「勝ち組」内の人間関係で独自性を主張しているのかもしれないが，内容は大同小異といえよう。

このような論説に対して，読者がもっとも期待している娯楽的小説となると，明らかに母国雑誌の転載に終わっている。

もともと，つまり戦前のブラジルの日本移民にとって，文化的娯楽の一つである雑誌は，日本から送られてくるものによっていた。太田恒夫は（太田恒夫（1995）『日本は降伏していない』文藝春秋社），それを「講談社文化の社会」「雑誌キングの社会」と比喩的に述べている。日本の大衆雑誌は，「勝ち組」「負け組」を問わないブラジルの日本移民の共通した基底的心情を揺さぶるものなのである。「勝ち組」の雑誌と呼ばれるものは，高踏的な精神主義を除けば，このような大衆の心情に依拠しようとしたのであろう。

④　当時の日本語新聞について

Y 氏の日本語新聞購読は昭和 24（1949）年から始まっている。その新聞の名前は記載されていない。

第二次世界大戦後，戦中のブラジル在住の日本人に対する行動制限は解けた。その結果，日本語新聞の発刊も再開された。

昭和 21（1946）年 12 月に『サンパウロ新聞』（1946・12 発刊）が発刊された。同年同月，『南米時事』も発刊され，また，戦前にあった『伯剌西爾（ブラジル）時報』が復刊された。これらの日本語新聞は，心情派に近い立場を取っていたが，それに対して，翌昭和 22（1947）年 1 月には，時局認識を標榜する『パウリスタ新聞』（1947・01 発刊）が発刊された。昭和 24（1949）年になると，『日伯毎日』（1949・01 創刊），『中外新聞』（1949・11 創刊），『昭和新聞』（1949・11 創刊）の 3 紙が創刊された。『日伯毎日』は認識派に近く，『中外新聞』と『昭和新聞』は，心情派つまり「勝ち組」の機関紙的新聞であった。

初めに Y 氏が購入した新聞は，購入先からして『サンパウロ新聞』であろう。後に購入した『中外新聞』は「勝ち組」のものであるが，これは「勝ち組」に強く共鳴したというよりも，「ムラ」の人間関係によるものと考えられる。

というのは，昭和 25（1950）年には，日本からの水泳選手が来伯し，ま

Hosei University Repository

た，勝太郎と東海林太郎が日本から直接やって来た。『ブラジル日本移民史年表』によれば，「古橋広之進一行の水上選手団着聖。遊佐正憲監督，村山修一主将，古橋広之進，橋爪四郎，浜口喜博。戦後日伯交流のさきがけとなったものである。」また勝太郎一行については「昭和26年1月，第1回芸能使節団着聖。東海林太郎，勝太郎，豊吉，篠田実父子」「第2回芸能使節団，古賀正男一行及び虎造，市丸等来伯。」と記されている。古賀正男一行はともかくとして，古橋一行と勝太郎一行の両者はともにプルデンテ・プルデンテ地方を訪れ，Y氏は家族を上げて，これを歓迎していることは，当時の物価からして，決して安くない資金を供出していることからも十分察せられる。

日本とのチャンネルが回復したのである。日本を通じたものであっても，より広い世界から情報が入るようになったのである。

⑤ ラジオ購入の意味

昭和27（1952）年は，戦後日本移民が再会され，日伯間の交流は一層進められた。「天長節」を寿ぐとともに，昭和28（1953）年にはブラジルの行事である「サンパウロ四百年祭」に寄付金を拠出する。利害状況によるものとしても，ブラジルに対するアイデンティティの表明がこのような形で行われるようになったのは，戦前に見られないことである。ラジオの購入は，このような過程の中で行われた。昭和29（1954）年7月に4,000クルゼイロの支出は大きい。当時の日本の給与所得者の初任給が1万円足らずの時，日本円で約4万5000円に当たるラジオの購入は，音楽だけでなくブラジル社会の言語生活への参加という意味を持つので，その文化的意味は極めて大きいといえるだろう。

⑥ 小さなまとめ

戦後の混乱期において，独立小商品生産者として，自作地を持った農業者として，日常生活に追われるということは，市場経済に立ち向かうための経済合理の世界に生きていかねばならないということである。この混乱期に，自らの土地を放棄して帰国を志したものの中に，その後の生活を失ったものが，この「ミネのムラ」にも一名いたが，多くのものは合理の世界に生きた結果，戦中，戦後のブラジルの経済的好況に支えられて，それなりの経済的上昇を遂げることができた。過激な精神世界にさらされながらも，それに踏み込み，溺れ

Hosei University Repository

ることなく，生活を維持した一つの大きな要因は，独立小商品生産者という立場があったと解釈できる。

（以下次号）